

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

宮沢賢治「さるのこしかけ」論

著者	高橋 直美
著者別名	TAKAHASHI Naomi
雑誌名	ライフデザイン学研究
巻	15
ページ	153-166
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011916/

宮沢賢治「さるのこしかけ」論

A Study about “SARUNOKOSHIKAKE”

高橋直美

TAKAHASHI Naomi

要旨

宮沢賢治の「さるのこしかけ」という童話については、これまで逢魔ヶ時（夕方）に見た夢の中の冒険談という研究^{注1)}や昔話「猿地蔵」との関連についての研究^{注2)}が主に行われてきた。

しかしながら、「銀河鉄道の夜」や「山男の四月」のような夢の中の話では、作者ははっきりと夢の話であると述べているため、夢の中の話ではなく、「どんぐりと山猫」のように少年が異界へ行って帰ってきた話であると考えられる。

また「さるのこしかけ」という題材については、サルノコシカケというキノコ（以下、キノコの場合はサルノコシカケとカタカナ表記とする）が木材腐朽菌として樹木を侵食することを小猿の軍隊が栗の木の内部を進行する様子に見立て、サルノコシカケの生存をめぐる小猿と少年のやりとりから、因果応報、生命の大切さ、万物の平等性などを描いた作品であると考察した。

作品については、大きいキノコには大将の小猿が座るなど、きのこの大きさが権力を表していること、栗の木の内部を通った小猿の異界はサルノコシカケの菌糸が栗の木を侵食している様子を表していること、体の大きさに60歳の小猿の大将を侮蔑し、小猿の本体であるサルノコシカケを下へ落そう（殺傷しよう）とした檣男に対する小猿の報復と、最後に心根を正したゆえに山男が檣男の命を助けたことなどを考察し、また作者や作者が影響を受けたであろう作品との関連性についても調査した。

キーワード：サルノコシカケ 小猿 異界 生命の尊厳 因果応報 差別・侮蔑

はじめに

本論は宮沢賢治の童話「さるのこしかけ」について、サルノコシカケと小猿の関係、小猿と樵男の関係、人間の世界と小猿の異界の関係、「さるのこしかけ」に関連する作品、山男についてなどを調査し、「さるのこしかけ」に込められた作者の思いを考察した。

1. さるのこしかけと小猿、子どもとの関係

宮沢賢治の「さるのこしかけ」の冒頭に、

樵夫は夕方、裏の大きな栗の木の下に行きました。其の幹の、丁度樵夫の目位高い所に、白いきのこが三つできてゐました。まん中のは大きく、両がはの二つはずっと小さく、そして少し低いのでした。

とある。

ここに登場する「白いきのこ」は、サルノコシカケとよばれるきのこである。

サルノコシカケとは文献によると、担子菌類、サルノコシカケ目サルノコシカケ科・マンネンタケ科・キコブタケ科の菌類のうち、とくに木質で多年生となるキノコを総称した一般名とある。多くは生枯れ木や枯れ木の幹に生える、棚形か馬蹄形をしたキノコであり、サルノコシカケという和名をもつ種自体は存在しない。

また、マイタケやトンビマイタケなどは食用のサルノコシカケであるが、マンネンタケやコフキサルノコシカケなどのように、昔から滋養強壯の漢方薬や民間薬として用いられるもの、その硬さを生かして生活用品になっているものもあり、人間の生活に有効活用されている。

しかし、その一方で、サルノコシカケ科に所属する菌は木材腐朽菌として樹木に被害を及ぼすことが多く、大部分は木材を分解して栄養源とする白色腐朽菌や褐色腐朽菌で、栄養源とする樹種については広葉樹のみ・針葉樹のみに限定される種類もあるが、多様なものもある。茸の発生は内部腐食の現れとされており、サルノコシカケが生えている木は、例え見た目が元気でも幹に相当な侵食をうけ、数年で枯れる運命にあるか、樹勢が弱る兆候といわれている。

また、シイタケやナメコ等の有用なキノコも材質腐朽菌の一種であるが、有用なキノコの多くは感染力が弱く、生きた樹木に悪影響を与えることは少ないのに対して、主に悪影響を及ぼす種類の多くはサルノコシカケ類だとされる。

以上のことから、サルノコシカケが生えた栗の木は、実は内部まで木材腐朽菌に侵され、回復の見込みがなく、死にゆく存在であることがわかる。

また、サルノコシカケの代表的な種類としては、ブナサルノコシカケ・ツガサルノコシカケ・コフキサルノコシカケがあるが、ツガサルノコシカケは針葉樹に発生し、ブナサルノコシカケとコフキサルノコシカケは広葉樹に発生する。ブナサルノコシカケは、コフキサルノコシカケと比較して発生量が多く、一般にサルノコシカケと呼ばれているのはこのブナサルノコシカケであるといわれており、傘表面の色も灰白色であり、「白いきのこ」に一致する。

一方、コフキサルノコシカケはサルノコシカケの傘表面がココア色の孢子粉で覆われており、粉が

あるサルノコシカケをコフキサルノコシカケと言うが、コフキサルノコシカケは胞子の飛散時期には子実体周辺を胞子でココア色に変色させるため、飛散時期でないもの（傘の表面が白っぽいもの）は、「白いきのこ」ともいえるだろう。

サルノコシカケが発生する樹木をみると、ブナサルノコシカケは名前の通りブナの木に多く発生し、コフキサルノコシカケは作品中に登場する栗を含めた広葉樹に広く発生する。

和田博幸の「サクラの材質腐朽病害の診断と治療」によると、コフキサルノコシカケは腐朽力が強く、短期間に樹勢を衰弱させることがあり、コフキサルノコシカケ、シイサルノコシカケ、ツガサルノコシカケ等が生立木での発生頻度・加害程度の激甚の種として挙げられている^{注3)}。

「さるのこしかけ」の本文に、「栗の木の三つのきのこの上に、三つの小さな入口ができてゐました。それから栗の木の根もとには、樵夫の入れる位の、四角な入口があります」「栗の木なんて、まるで煙突のやうなものでした。」とあることから、作中の栗の木の中には空洞の異界があることが読み取れる。

この物語は、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話「火打ちばこ」で兵隊が火打ちばこを取りに入る木のうろを彷彿とさせ、樹木の内部での腐朽が疑われる。

このような特徴をもつがゆえに、賢治はサルノコシカケを異界に入り込む作品のテーマとして選んだと考えられる。また、

丁度樵夫の目位高い所に、白いきのこが三つできてゐました。まん中のは大きく、両がはの二つはずっと小さく、そして少し低いのでした。

との記述が「さるのこしかけ」にあるが、一般的にサルノコシカケは高所にありかつ大きなもののほど高価であることから、小猿の大將をまん中の大きなキノコに、両がわの二つの小さなキノコをそれぞれ兵隊に見立てたと考えられ、小猿たちはそれぞれのサルノコシカケの化身であると理解できる。

賢治童話の「狼森と策森、盗森」では、狼森の化身として9匹の狼が、策森の化身として大きな策の中にいた山男が、盗森の化身としてまっくろな手の長い大きな大きな男が登場するが、サルノコシカケと小猿の関係はこれと同じであろう。

そして、この小猿がサルノコシカケに座る様子は、『不思議の国アリス』に登場する、きのこの上に座った「a large blue caterpillar, which was sitting with its arms folded」に似ている。この芋虫はアリスに対して最初に「Who are you?」と聞くが、それはアリスが初対面の相手だったからである。

しかしながら、主人公である樵男の家の裏にある栗の木やそれに寄生するサルノコシカケは、樵男の存在を知っているため、小猿の大將は樵男に「おまえが樵夫か。ふん。何歳になる。」と言ったのであろう。年齢を聞いたのは、子どもである樵男に自分が60歳の大將であることを強調し、威張りたいためだと思われる。

栗の木は縄文時代から湿気に強くかつ防虫防腐処理をしなくても腐りにくく、加工がしやすい等のため、優良な木材として利用されている^{注4)}が、作品中の栗の木は「大きな栗の木」であり、そこに巣食うサルノコシカケの化身である小猿の大將が60歳だということから、かなりの老木と考えられる。体の小さな小猿の大將は年齢と地位で樵男を見下すが、これは優位に立てる条件が年齢と大將という地位しかないからだと考えられる。

しかしながら、樵男は小猿の大將の年齢も地位も全く意に返さず、体の大きさと人間であるという

ことだけで小猿を見下し、小猿の大將に対して「何だい。六十になっても、そんなにちいさいなら、もうさきの見込が無いやい。腰掛けのまゝ下へ落すぞ。」と威嚇する。

ここで重要なのは、「腰掛けのまゝ下へ落す」という威嚇に対する小猿の大將の変化である。小猿の大將は「気になる笑い」をうかべ、

楢夫さん。いや、どうか怒らないで下さい。私はいゝ所へお連れしやうと思って、あなたのお年までお尋ねしたのです。どうです。おいでになりませんか。いやになったらすぐお帰りになったらいゝでせう。

という部分である。小猿の大將は猿知恵を駆使して楢男に報復すべく小猿の異界へと誘うため、その条件である年齢制限に抵触しないかを確かめている。

このような怪異とのやり取りは童話「種山ヶ原」にも以下のように描かれている。

山男が楢の木の下からまっ赤な顔を一寸と出しました。

(なに怖いことがあるもんか。)

「こりゃ、山男。出はって来。切ってしまふぞ。」達二は脇差しを抜いて身構へしました。

山男がすっかり怖がって、草の上を四つん這ひになってやって来ます。髪が風にさらさら鳴ります。

「どうか御免御免。何じよなことでも為んす。」

「うん。そんたら許してやる。蟹を百疋捕って来。」

「ふう。蟹を百疋。それ丈けでようがすかな。」

「それがら兎を百疋捕って来。」

「ふう。殺して来てもようがすか。」

「うんにゃ。わがんない。生きだのだ。」

「ふうふう。かしこまた。」

油断をしてゐるうちに、達二はいきなり山男に足を捉まいて倒されました。山男は達二を組み敷いて、刀を取とり上げてしまひました。

「小僧。さあ、来。これから俺れの家来だ。来う。この刀はいゝ刀だな。実に焼きをよぐかげである。」

「ばが。奴の家来になど、ならない。殺さば殺せ。」

「仲々ず太いやづだ。来ったら来う。」

「行がない。」

「ようし、そんたらさらって行く。」

山男は達二を小脇にかゝへました。達二は、素早く刀を取り返して、山男の横腹をズブリと刺しました。山男はばたばた跳ね廻って、白い泡を沢山吐いて、死んでしまひました。

この作品を読んだ子どもたちは、怪異は低姿勢で巧みに近づき、子どもに害を加えようともくろむことに気づく。神隠しや人さらいの話が聞かされていれば、なおさらである。

『注文の多い料理店』の広告文に

- 一. これは正しいものゝ種子を有し、その美しい発芽を待つものである。而も決して既成の疲れた宗教や、道徳の残澤を色あせた仮面によつて純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない。

とあるように、賢治童話は子どもたちに既成の価値観を押し付けることはせず、子どもたちが自分で考えることを手伝う。それゆえ、話の内容は勧善懲悪はなく、自らの読み方や感じ方を大切にしているのである。

小猿の大將が檣夫に年齢を聞く場面は、童話「雪渡り」にある「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と小狐の紺三郎が尋ねる場面と同じである。それに対して四郎は「いや小兄さんは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と答えると、子狐の紺三郎に「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。」と言われてしまう。

同じく「どんぐりと山猫」の一郎も「子ども」だからこそ山猫の裁判に出席できたのであり、賢治童話で異界に入るためには、「子ども」であることが重要となる。これはいわゆる「7歳までは神のうち」的な発想と、子どもの純粋さゆえに不可思議な世界をそのまま受け入れることが可能なため、すなわち、相手をありのまま認めることができるため、異界との交流が可能であると考えたからであろう。

2. 木の中のトンネル

小猿が先導して入った栗の木の内部の空洞は、

栗の木なんて、まるで煙突のやうなものでした。十間置き位に、小さな電燈がついて、小さな小さなはしご段がまわりの壁にそって、どこまでも上の方に、のぼって行くのでした。

と記され、「眩しいひるまの草原」に出る。

『不思議の国のアリス』でアリスがウサギ穴に落ちる場面は、

The rabbit-hole went straight on like a tunnel for some way, and then dipped suddenly down, so suddenly, that Alice had not a moment to think about stopping herself before she found herself falling down what seemed a deep well.

とあり、「さるのこしかけ」とは逆に、穴から地下に落ちていく。

一方、アンデルセン童話「火打ちばこ」に描かれている「大きな木のほら」は、

「そら、大きな木があるだろう」と、おばあさんはいって、ふたりのそばに立っている木を指しました。

「この木は中ががらんだうなんだよ！さあ、てっぺんまで登ってごらん。そしたら、あなが見える。その中をすべりおることができて、木の中に深くはいれる。おまえさんのからだになわをしぱりつけてあげるから、あたしを呼べば、引きあげてやることができるよ！」

(中略)

「いいかい。木の底におりるとね、大きなろうかで、すみずみまで明るいんだよ。百以上もランプがともっているんだからね。」

とあるように、木の内部の空洞は「さるのこしかけ」と一緒であるが、一度頂上まで登り、そこから木の中の空洞を滑って落ちて地下に行くため、『不思議の国のアリス』同様、異空間は地下にある、ということになるが、百以上のランプがともっている廊下のイメージは、小猿と檣男が上っていく階段の明かりによく似ている。

しかしながら、「さるのこしかけ」の異界は栗の木の中、あるいは、そこを通った先にある異世界であるが、その世界は人間である檜男には狭い空間であることがわかる。

それは、「檜夫はすっかり面白くなって、自分も立ちあがりましたが、どうも余りせいが高過ぎて、調子が変わるので、又座って云いました。」とあり、檜男にとってその草原は狭く感じ、調子が変わることから推測できる。本当の草原であれば、立ちあがった際に窮屈な思いはしないはずである。

この異界をサルノコシカケが蔓延する栗の木の中の世界であると仮定すれば、木の内部を上る行為（菌の蔓延）や檜男の違和感（木の空洞の中の世界）、そして、草原における小猿の勢力（栗の木に蔓延する菌の勢力）についても説明がつく。

3. 小猿について

「さるのこしかけ」に登場する小猿には大将とその部下がいるが、真ん中の大きなサルノコシカケには大将の小猿が、それより「ずっと小さく、そして少し低い」両側にある小さなサルノコシカケには、肩章も見えないほど小さな兵隊の小猿がそれぞれ出現する。

ところで、日本で三猿といえば、日光の東照宮や庚申塔にみられる「見ざる、聞かざる、言わざる」が有名である。柳田国男の「猿の祭り」（昭和24年3月）には、庚申という信仰行事について、

祭場が山の麓に在り、嶺より尊神を御迎へ申すといふ信仰がすでにあつた故に、乃ち猿に該當する日を、例祭と定めやすかつたであらうと、私は今推測して居るのである。

とあり、『日本民俗大辞典 上』（1999年8月）の「さる」の項には、

『古事記』や『日本書紀』に登場する猿田彦は天界と地上を媒介する猿神であった。（中略）この天界と地上の媒介という役割は、村落の内と外の境界で外からの侵入に対しての排除と内側を守る神仏の信仰とも習合し、庚申や塞神あるいは地蔵とも結びついた。特に道教の広がりによって流行した庚申信仰では、庚申の夜、三尸の虫が天界で人間の悪行を告げるのを防ぐため、夜明かする風習が始まり、猿と申の音の共通によって庚申塔に「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿が彫刻されることになったとされる。

とある。

また、『日吉山王権現知新記』や『山王曼荼羅』の図表に描かれている大行事は、衣冠束帯をつけた猿であり、これは神という文字を「申」と「示」に分けて考えられるからだとして『耀天記』の「山王事」に記されている。しかしながら、大行事は「悪神」と見做される場合があり^{注5)}、昔話「猿神退治」における猿神の正体は猿の妖怪である。柳田説のように、妖怪とは神が零落したものと考えれば、猿に関する神＝悪神＝妖怪という説も成り立つであろう。

また、「さるのこしかけ」に登場する三匹の小猿のうち、大将の小猿は手帳のようなものを手にしているが、これは「閻魔帳」のようなものではないかと考えられる。

なぜなら、三猿は庚申の夜に天帝に人々の悪事を告げる三尸との関係で登場したと言われており、大将の小猿もまた檜男の罪を閻魔帳に記し、檜男の言動から異界に連れ去り、胴上げをして落とすという判決を出したと考えられるからである。

「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿の由来は、『論語』にある「非礼勿視、非礼勿聴、非礼勿言、

非礼勿動」といわれており、「礼に背くものは」という前提があるため、小猿が檜男を落とそうとした原因も、檜男の小猿に対する非礼な言動にある。

「ははあ、これがさるのこしかけだ。けれどもこいつへ腰をかけるやうなやつなら、すみぶん小さな猿だ。そして、まん中にかけるのがきっと小猿の大將で、両わきにかけるのは、たゞの兵隊にちがいない。いくら小猿の大將が威張ったって、僕のにぎりこぶしの位もないのだ。どんな顔をしてゐるか、一ぺん見てやりたいもんだ。」

「何だい。六十になつても、そんなにちいさいなら、もうさきの見込が無いやい。腰掛けのまゝ下へ落すぞ。」

という言葉が示す通り、檜男は小猿という理由のみで最初から相手を見下すが、60歳の小猿の大將にしてみれば、年長者に対する敬意にかけ、種族や体の大きさによる侮蔑や差別は不条理以外のなにもでもなく、「腰掛けのまゝ下へ落すぞ。」と言われれば、生命の危機を感じるのは当然である。

その結果、小猿の大將は、檜男に対して気になる「笑い」をし、檜男の言葉をそのまま本人に返すような行為＝檜男を高所から落とすことに決めたと考えられる。一種の因果応報である。

1918年5月19日 宮沢賢治が保阪嘉内にあてた封書には、

常に絶えず犠牲を求め、魚鳥が心尽しの犠牲のお膳の前に不平に、これを命とも思はずまずいのだろうと云ふ人たちを食はれるものが見てゐたら何と云ふでせうか。

とあるが、このように視点を逆転させる発想により、人間の世界では檜男が優位であるが、小猿の世界では檜男と小猿の立ち場が逆転し、小猿が優位に立つのである。

4. 逆転する世界観

上記のように、檜男の威圧的で不遜な態度と「腰掛けのまま下へ落すぞ。」という生命を脅かす言葉が因果応報としてそのまま自分に返り、檜男は小猿の異界で捕虜として高所から落とされそうになる。

栗の木の内부를登ったにもかかわらず、「眩しいひるまの草原」である小猿の異界は、人間の世界とは逆に檜男には小さすぎて、檜男を「へんな調子」にさせる。しかも、現実世界の夕方に対し、「眩しいひるま」であり、時間まで真逆になっている。

また、人間界では檜男に侮蔑された小猿であるが、栗の木から入った異界は小猿の世界であるため、小猿が絶対的な存在として檜男を圧倒して縄で縛り、一条乱れぬ連携で檜男を高所から落とそうとするが、これは小猿の異界と檜男の住む人間界とでは世界が逆転しているからである。

『ガリバー旅行記』の「第一篇 リリパット国渡航記」で、ガリバーは小人の国リリパット国の捕虜となり、紐で縛られて槍や弓矢で攻撃されるが、小人に危害を加えなかったために王宮に運ばれ歓待される。檜男の場合、これとは逆に小猿に無礼を働いたために罰を与えられる。

『ガリバー旅行記』も「さるのこしかけ」も立場が変われば見方が変わり、しかも、それがその世界では当然のこととして述べられている。「さるのこしかけ」で檜男が綱で縛られる場面は、ガリバーが縄で縛られる場面を模したものと思われるが、単に描写が似ているだけではなく、それぞれの国(世界)によって価値観が異なることも同様である。

また、小猿が軍人の服装をしていることに関しては、日枝神社にある神猿が烏帽子姿であるなど品

位に適した服装をしているは前述のとおりだが、栗の木を腐朽させ、菌糸が木を侵食するように小猿の群れが檜男に襲い掛かる様子を軍隊に見立て、一番大きく立派なきのこを大将に見立てて、「草原一杯もちゃもちゃはせ廻る小猿の群れは栗の木におけるサルノコシカケの浸潤を表していることが理解できる。

サルノコシカケは生きた樹木を腐朽させるが、それは自らが繁栄するために、寄生するのであり、サルノコシカケからすれば、その行為は子孫繁栄のために不可欠な善なる行為といえる。

賢治は大正七年三月十日 宮沢政次郎宛書簡に「戦争は人口過剰の結果その調節として常に起るものに御座候」と述べているが、小猿の大将はまさに、サルノコシカケの勢力増大のための大将なのである。

また、人間界では体が大きく、小猿を圧倒するような檜男であるが、一步小猿の異界に入ると、
「さあさあ、こちらへおいで下さい。」小猿はもうどんどん上へ昇って行きます。檜夫は一ぺんに、段を百ばかりづゝ上って行きました。それでも、仲々、三疋には敵ひません。

檜夫はつかれて、はあはあしながら、云ひました。

「こゝはもう栗の木のてっぺんだらう。」

猿が、一度にきゃっきゃっ笑ひました。

「まあいいからついておいでなさい。」

と子分の小猿にまで後れを取ってしまう。これも逆転する異界だからであろう。

また、還暦の大将という設定は、知識や経験のみならず、軍隊（領土拡大）経験が豊富で多くの部下がいることを示し、小猿の異界で繰り広げられる演習（繁殖）を指揮していることが暗示されている。

しかも、檜男は小猿の軍団が菌をむいて突貫してきた際に「余程撲ってやろうと思ひましたが、あんまりみんな小さいので、じつと我慢をして居ました。」と、自分の世界で小猿に取った行動とは真逆の、消極的かつ受け身で優しささえ感じられる姿勢になってしまう。

これは、その異界が小猿の世界であって檜男の世界ではないからであり、不思議な世界に翻弄される、『不思議の国のアリス』のアリスと同様である。

「どんぐりと山猫」に「やつぱり、出頭すべしと書いてもいゝと言へばよかつたと、一郎はときどき思ふのです。」とあるように、一郎が山猫の裁判に呼ばれなかったのは、子どもらしい、純粋な感性の表出ではなく、大人の功利的な話をしてしまい、相手の立場を全く認めなかったからである。賢治童話の世界では登場人物がそれぞれの世界観を持ち、生き生きとその存在価値を発揮しているが、自分が相手を認めない限り、自分もまた相手から認められないのである。

5. 山男と栗の木

岩手県軽米町市野々地区（岩手県九戸郡軽米町大字小軽米第17地割89番地⁶⁾にある「市野々の大栗」は樹高15m、幹周り6.5m、根元周り8.1m、推定樹齢は650年とされる巨大なクリの木で、平成5年当時、日本植物保護推進会議によってクリの木の中では国内1位の巨樹であると確認されていた。この木は地元では「てんぐさま」と呼ばれ、神様の木として親しまれている^{注6)}。

天狗とは『日本怪異妖怪大辞典』（2013年）に、

江戸時代以降の天狗は、もはや仏法の敵でも政敵でもなく、民間伝承のなかで一種の山の神のような存在として人々の畏怖を集めるようになる。(中略) このように妖怪のなかでもとりわけ神に近い存在として恐れられまた敬われている天狗だが、昔話のなかで人間に簡単にだまされる間抜けな存在として登場することが多い。

とあり、『日本伝奇伝説大事典』(昭和61年)には、「天狗はまた、狗賓、山人、大人、山の神などと同じものと考えられ」とある。天狗は巨木にいとされており、「市野々の大栗」は「てんぐさま」=山の神であるとも考えられる。

一般的に栗は「西の木」と書くゆえに、西方十万億土にゆかりのあるものとして仏壇などにも用いられている。また「水仙月の四日」にも栗の木は神聖なものとして描かれており、栗の木に寄生したヤドリギを縁として、雪童子は雪山で遭難した子どもを助けることになる。

同様に窮地に陥った檜男を助け、異界から連れ出した山男は、やはり栗の木の化身、あるいは「市野々の大栗」同様に土地神のような存在であると考えられる。

賢治作品における山男は「山男の四月」に、

(ところがここは七つ森だ。(中略) おれはまもなく町へ行く。町へはいつて行くとすれば、化けないとなぐり殺される。)

山男はひとりでこんなことを言ひながら、どうやら一人まへの木樵のかたち化けました。そしてたらもうすぐ、そこが町の入口だつたのです。(中略)

山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いてゐるのかなとおもひました。さうしてみると、いままで峠や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考へ込んでゐたやうな支那人は、みんなこんなことを誰かに云はれたのだなと考へました。山男はもうすつかりかあいそうになつて(後略)とあるように、異界と人間界との境界や差別を超え、お互いの気持ちを理解することができる。

「種山ヶ原」では、夢の中で「山男が檜の木のうしろからまっ赤な顔を一寸と出し」、達二と争った挙句に達二に刀で横腹をさされて死んでしまうと、「急にまっ暗になって、雷が烈しく鳴り出し」て達二は夢から覚めるがこの作品も夢から現実へと戻る際に山男が登場する。

善悪の違いはあるが、山男は人間の世界と異界とも行き来できる存在なのである。

ところで、「さるのこしかけ」では、サルノコシカケに侵食される栗の木の立場について触れられていない。命の大切さを説く賢治ではあるが栗の木に対しては、「ビジテリアン大祭」に、

もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらも食べていゝ、そのかはりもしその一人が自分になった場合でも敢て避けないとかう云ふのです。

とあるような認識で記したとも考えられる。すでにサルノコシカケに侵食されてしまっているため、栗の木はサルノコシカケの生存を支える存在なのかもしれない。どちらにしても、栗の木は1つの世界を構成し、その中には善も悪も等しく存在している。

しかしながら、檜男に対する小猿の仕打ちは必要な犠牲ではなく、命の尊さから離れたものである。しかも、檜男は小猿の異界で小猿に対する認識を改めている。そのため、山男が現われ、改心した檜男を救出したのと考えられる。

「サルノコシカケ」の山男は「種山ヶ原」の山男と異なり、檜男が窮地の際に現れ、小猿たちから

救い出してくれる。山男が身近な存在として認識されていたことは、檜男の「ああ山男だ。助かった。」ということばかり理解できる。そうでなければ、「種山ヶ原」の達二のように、山男は異界の住人であるゆえ、人に害をなすものとして認識されるはずである。しかしながら、檜男が山男と知り合いだとは思えない。ではなぜ檜男は「ああ山男だ。助かった。」と思ったのか。それは、山男は山男の姿をした身近な存在、善なる存在だと檜男が感じたからである。

6. 「さるのこしかけ」と他の賢治作品との関係

「さるのこしかけ」は賢治作品、特に『注文の多い料理店』に掲載されている作品との共通点が多く見受けられる。

小猿がサルノコシカケの化身であるように、自然物がその化身を現すものとして、前述の「狼森と笹森、盗森」がある。

次に、人間の世界と並行する異界が存在する作品としては、「どんぐりと山猫」、「山男の四月」などがあるが、前者は子どもが異界に行く話であり、後者は怪異境界を越えて人界（里）へ下りる話である。「どんぐりと山猫」は一郎少年が異界の裁判に立ち会う話であるが、物語の最後に「それからあと、山ねこ拝といふはがきは、もうきませんでした。やつぱり、出頭すべしと書いてもいゝと言へばよかつたと、一郎はときどき思ふのです。」とあり、子どもの純粋な心から離れ、相手の世界やその価値観を認めなかったために、異界への扉が開かなくなってしまうという内容で、「山男の四月」は人間と山男、日本人と「支那人」という、自分とは異なる相手への警戒心や恐怖、差別や侮蔑、相手に受け入れられない悲しみが描かれており、お互いを尊重することの大切さが述べられている。

「さるのこしかけ」も相手を認めずに侮蔑や差別、高圧的な態度をとった檜男が、因果応報で自分が窮地に陥る。「ずうっと向うで、河がきらりと光りました。」とあるが、川はこの世と異界の境界であり、檜男の見た川は三途の川、または、あの世とこの世との境界としての川であろう。檜男はここが異界であり、あちら側が自宅のある現実の世界であることを知る。そして、山男により救出され、異界から現実世界へ戻るのである。

賢治作品では「銀河鉄道の夜」や「種山ヶ原」のように夢と現実がリンクする物語と、「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」のように人間界と異界がリンクする物語があり、「さるのこしかけ」は後者に属している。

なぜならば、山男に助けられた檜男は「うちの前の草原」に降ろされるが、「銀河鉄道の夜」には「ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむってゐたのでした」とあり、夢であった証拠が記されていることから理解できる。夢の世界を描いた「山男の四月」にも「「えゝ、畜生、夢のなかのこつた。陳も六神丸もどうにでもなれ。」それからあくびをもひとつしました。」とある。

以上のように、小品ではあるものの、「さるのこしかけ」には賢治童話のエッセンスが豊富に含まれている。

また、賢治作品以外の要素も多くみることができる。栗の木の中の階段を上る際に「此処へしるしを付けて行こう。うちへ帰る時、まごつくといけないから。」とあるのは、グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」で二人が両親に森の中に連れられて行くとき、帰りの目印として置いた小さなパンく

ずと同じ役割をしており、結局、役に立つことはなかったものである。

また、小猿の大將による理不尽な行為を受けながらも現実世界にかえってくる様子は、『不思議の国のアリス』のハートの王と女王の裁判に描かれている理不尽な判決とアリスがトランプ兵に襲われる場面に近似しており、夢から覚めたアリスに姉が「But now run in to your tea ; it's getting late.」という場面も「もう夜です。『檜夫。ごはんです。檜夫。』とうちの中でお母さんが叫」ぶ場面と非常によく似ている。

また、小猿が6匹ずつ肩車をして高い塔のようになる場面は、千匹狼の肩車を彷彿とさせる。これは一匹ずつでは敵わないために数の多さで問題を解決しようとする怪異の高度な戦略である。

7. まとめ

以上のように、「さるのこしかけ」は、『注文の多い料理店』序にある、「深い^マ櫺の森や、風や影、^マ肉之草や、不思議な都会、ベーリング市まで続く電柱の列、それはまことにあやしくも楽しい国土」が作品の中にあり、「少年少女期の終りごろから、アドレッセンス中葉に対する一つの文学」として成立している。

檜男の小猿に対する差別や侮蔑と小猿の暴力による報復は、読み手にとって決して気持ちの良いものではなく、むしろ、それらの行為に対して反感を持ち、正しいあり方を考えさせる。

童話「猫の事務所」では周囲から差別やいじめを受けていた「かま猫」の様子を見た獅子が事務所を廃止するが、賢治は作中で「ぼくは半分獅子に同感です。」と述べている。なぜ全てではなく半分同感なのか。いじめや差別を解消することは当然であるが、権力で高圧的に解散させることが本当に良いのかを賢治は子どもたちに考えてほしかったのではないかと推察される。

本論では、小猿＝サルノコシカケの化身、栗の木の異界＝サルノコシカケに侵された栗の木内部の異界としたが、たとえサルノコシカケが木材腐朽菌であり、樹木の命を奪う存在であっても、それが生きるために必要な行為であるかぎり、万物に平等で、大切な生命であることには変わりがない。

『大般涅槃経』に「一切衆生悉有仏性」とあるが、賢治の信仰する日蓮宗では有情・無情すべての森羅万象が仏性を備えているとみなし、「一切衆生」がことごとくみな仏となる（一切衆生悉皆成仏）と説かれている。

それゆえ、異界の住人をも含めた全ての生物の命は大切であり、たとえ子どもであっても因果応報は存在し、檜男は自らの心を改め、相手の立場を理解することで救われる。

一方で、「さるのこしかけ」の内容には、『不思議の国のアリス』やアンデルセン童話、グリム童話、日本の昔話等と類似した部分がある。これらは賢治がそれぞれの作品を巧みに自らの作品に取り入れ、新たな童話世界を創作しようとしたのかもしれない。

そして、全てのものがそれぞれの持つ価値観や生きる世界を持ち、そして、お互いにそれを認め合うことの大切さを賢治はこの作品に込めたのではないかと考える。

注1) 関口安義「賢治童話を読む④『さるのこしかけ』」『論叢児童文化(46)』2012年

注2) 渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』(勉誠出版 平成19年8月10日)

- 中野隆之「さるのこしかけ—昔話『猿地蔵』との関連で」『宮沢賢治童話作品論集』 葦書房 1996年10月
- 注3) 「サクラの材質腐朽病害の診断と治療」和田博幸 (財)日本花の会 花と緑の研究所
http://www.jpgreen.or.jp/kyoukyu_jyohou/gijyutsu/j_shindan/pdf/05_200704wada.pdf
2019年9月22日0時28分閲覧
- 注4) 米沢弘「縄文文化における信仰の原風景をさぐる」
『文教大学国際学部紀要 7巻』 1997年1月1日
- 注5) 網野 暁「日吉社組織における大行事の位置」『年報中世史研究』(22) 中世史研究会 1997年5月
- 注6) 岩手県軽米町観光&物産情報(軽米町観光協会)
https://www.karumai-kanko.jp/kanko_data/ichinononoookuri 2019年9月17日0時11分閲覧

参考文献

- 『新 校本 宮沢賢治全集』 筑摩書房 1995年12月25日
- 福田アジオ編『日本民俗大辞典』 吉川弘文館 1999年8月
- 小松和彦監修『日本怪異妖怪大辞典』 東京堂出版 2013年7月13日
- 『定本 柳田國男集』 筑摩書房 昭和53年4月30日
- 今関六也・本郷次雄(編著)『原色日本新菌類図鑑』II、保育社 1989年5月1日
- 原子郎『新 宮沢賢治語彙辞典』 東京書籍 1999年7月26日
- 渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』 勉誠出版 平成19年8月10日
- 天沢退二郎他『宮沢賢治イーハトヴ学事典』 株式会社弘文堂 平成22年12月15日
- 畑山博『宮沢賢治幻想辞典』 六興出版 1990年10月1日
- 乾克己他編『日本伝奇伝説大事典』 株式会社 角川書店 昭和61年10月10日
- 本郷次郎監修『カラー版 きのか図鑑』 社団法人 家の光協会 2001年8月1日
- ピーター・ロバーツ他(訳者齊藤隆実)『原色・原寸 世界きのか大図鑑』 株式会社東洋書林 2012年10月31日
- 日本菌類学会『菌類の事典』 株式会社朝倉書店 2013年10月31日
- 牧野富太郎『新牧野日本植物図鑑』 株式会社北陸館 平成20年11月25日
- 『宮沢賢治の全童話を読む』 学燈社 2003年5月1日
- ルイス・キャロル『Alice's Adventures Under Ground (復刻版)』 書籍情報社 1988年12月24日
- 高橋健二 訳『アンデルセン童話全集1』 小学館 昭和54年12月10日
- 城川四郎『猿の腰掛け類きのか図鑑』 地球社 1996年1月1日
- 金田鬼一訳『完訳 グリム童話集』 岩波文庫 2010年3月15日
- 関口安義「賢治童話を読む②『さるのこしかけ』」『論叢児童文化(46)』 2012年
- 米沢弘「縄文文化における信仰の原風景をさぐる」
『文教大学国際学部紀要 7巻』 1997年1月1日
- 網野 暁「日吉社組織における大行事の位置」
『年報中世史研究』(22) 中世史研究会 1997年5月
- 中野隆之「さるのこしかけ—昔話『猿地蔵』との関連で」『宮沢賢治童話作品論集』 葦書房 1996年10月
- 堀江珠喜「宮沢賢治と『不思議の国のアリス』」『英米言語文化研究』(47) 英米言語文化研究 1999年
- 大阪府立大学英米言語文化研究会
- 果樹栽培ナビ
<https://www.kajyu.org/saibai-nasi-kinoko.html> 2019年9月13日15時16分閲覧
- 岩手県軽米町観光&物産情報(軽米町観光協会)
https://www.karumai-kanko.jp/kanko_data/ichinononoookuri 2019年9月17日0時11分閲覧
- 東北森林管理局 <http://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/welcome/index.html> 2019年9月14日40分閲覧

「サクラの材質腐朽病害の診断と治療」和田博幸（財）日本花の会 花と緑の研究所

http://www.jpgreen.or.jp/kyoukyu_jyouhou/gijyutsu/j_shindan/pdf/05_200704wada.pdf

2019年 9 月22日 0 時28分閲覧

A Study about “SARUNOKOSHIKAKE”

TAKAHASHI Naomi

Abstract

Kenji Miyazawa's tale “SARUNOKOSHIKAKE” has been said an adventure in evening dream.

However, this tale was not clearly written as a dream story like “*Night on the Galactic Railroad*”, thus, this tale seems that a boy had visited an alien world and then went back to his world as “*DONGURITTOYAMANNEKO*”.

On the other hand, the main subject of this tale is an aggression and an erosion by bracket fungus as a pest in the forest and this images attacking on apes troops. From discussion between apes and a boy with bracket fungus, it can be considered that this tale describes the importance of the life, the equality of the all of things and so on.

In the story, I focus on three points.

Firstly, the size of bracket fungus indicates the apes' authority.

Secondary, the apes' alien world that is be able to enter form inside of chestnut tree describes an erosion of the chestnut tree by the germ form bracket fungus.

Finally, the apes' revenge for a boy named Narao who insulted and tried to kill apes.

I also checked how those factors relative Kenji's other works.

From this research, I conclude that Narao who had been haughty and scorn for others revised own bad attitude in the apes' alien world, therefore, Yamaotoko appeared and stopped the needless fighting between apes and Narao, then he repatriated Narao to this world.

Keywords : SARUNOKOSHIKAKE (Bracket fungus) , Alien world, The dignity of the life, Cause and effect, Discrimination and Scorn